
便利屋『境』

斎藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

便利屋『境』

【Nコード】

N9141K

【作者名】

斎藤

【あらすじ】

便利屋『境』のアルバイト店員紫苑 昌はなんと夜逃げの手伝いをする事になった、

（前書き）

はじめまして、斎藤と言います、精一杯頑張りましたのでしばしのお付き合ひ、どうか宜しくお願いします。

便利屋、一般的には庭の草むしりやら引越しの手伝い、はたまた子供の遊びの相手から犬の散歩といういわば実生活における雑用を依頼人の代わりに行う仕事だ、と思う、

まあ俺のバイト先もほとんどは同じなんだけどさ、たまーにやばい仕事があるんだよな、ま、それが俺の日常なんであんまり突っ込まないでくれよ、それじゃ始めますか。

「紫苑 昌！いい加減起きろ！」

スコーンと俺の頭に教師が投げたチョークが当たった、周りから失笑が沸き起こる

「ふあゝい、おきまふ」

気の抜けた返事をしながら俺は黒板に目を向けた、

「全くお前って奴は」

「いい加減真面目にやれよ」

周りの冷やかしを無視して、黒板の字を写す。

口やかましいだけで中身が無い先公のかつたるい授業、何処かけだるい毎日それが俺の日常だった。

「ああ、終わった、やっと週末だ」

放課後、帰り支度をしていると肩を叩かれた、

「昌、一緒に帰ろうぜ」

俺は曖昧な笑いを浮かべ返いた

「悪いな、今日もバイトなんだ」

歩き出す、しかし奴はわざわざ俺の前に周り込んむ、

「何だよ」

平均的な背の男子高校生である俺の視線より若干上にある奴の目を睨み付ける、だが奴は苦々しい表情を浮かべただけで直ぐに歩き去った。

「・・・行くか」

ため息混じりに呟き何と無く外を見る、空には鈍よりとした曇り空が広がっていた。

雨でも降ってくんじゃ無いかと不安だったのだが取り越し苦労だったようで今は青空が広がっている。

俺の前には三階建てのこぢんまりとしたビルがある、そのビルの二階に俺のバイト先である便利屋『境』がある、何でこんな名前なのかは解らない多分適当に名付けたのだろう、

ドアを開けどうせ誰もいないだろうと挨拶もせずに、手近な場所に荷物を置きこれまた手近なソファに座り本棚から数週間前の漫画雑誌を取り出し読み出した、

「冒、来てたの？」

突然声を掛けられ思わずそっちの方を見るとそこには俺と同年代の女の子が座ってこっちを見ていた、線は細く小柄で光沢のある黒い髪を肩まで延ばして顔立ちも整っている、所謂美少女だ

「いたのか、下弦」

こいつは下弦、俺と一緒に『境』で働いている、同僚だ、年齢は俺と同じで此処に住み込みで働いている事しか知らない、俺が此処で働き出した一年前にはもう働いていたのだからバイト先の先輩に当たる、

「来たのなら挨拶ぐらいしない？普通」

下弦が抑揚の無い声で俺に言う、

「ごめん、てつきり誰もいないと思ったんだ」

俺の弁解を聞いて下弦は黙り込む、俺も漫画雑誌に目をやると室内を静寂が包み込んだ。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

静かだ、若干気まずい、騒がしいのは苦手だけど此処まで静かなのもどうかと思う、下弦が何をしてるのかと様子を伺うとノートに何かを書き込んでいた、ノートの周りに電卓とレシートが見えるから家計簿を付けているのだろう。

「なあ、下弦、『晦』さんは？」

『晦』さんーフルネームは『晦 朱音』この『境』の店主だ。

「引越しの手伝いにいつてる筈だけど」

「そうなんだ」

「……話が続かないな、更に気まずくもなっちまったし、

「暇だな」

再び話し掛けてみるが返答なし、いつか聞いた話を思い出しもう一度口を開く、

「そうそう、暇と言えばこんな話を聞いた事があるんだけど」

前置きして本題に入ろうとすると、

「昌、待って」

下弦に割って入られた、

「ん？」

漫画雑誌から顔を上げると下弦が俺を見据え、

「その話、面白い？」

俺はしばし考えてかぶりをふった、

「あんまり」

何か無いかと周りを見回す、デスクの上に焼肉屋のチラシを見付けた、

「下弦！焼肉食べ放題だつて！」

妙なテンションになった俺に下弦はただ冷たい視線を送るだけだった。

数分後、会話を諦めて漫画雑誌を読んでいると電話が鳴った、

「出るけど・・・良いよな？」

下弦は答えずに家計簿を書き綴る、その態度を肯定と見なし電話に出ると向こうから女性の声が聞こえて来た、

「あつ、晦さん」

電話を掛けてきたのは今さっき話に出た『晦』さんだった、

「なんだ、昌か調度良かった、明日の予定無いよな」
明日？

「はい・・・あの仕事ですか？」

「ああ、明日の夜、お引越しの仕事が入ったんだよ」

・・・夜に引越し？

「えーっと、もしかするとそれは」

嫌な予感がする、想像が飛躍しすぎかも知れないが、まさか仕事つてのは、

「そつだ、夜逃げの手伝いだ」

当たってたああ！

「晦さん！待ってください！」

「いやあ、謝礼も弾むって言うし、あたし達は何時も通り引越しさせれば良いんだから、悪い話じゃ無いだろう?。」

そつだ、落ち着け俺、夜逃げだからってヤクザ関係とは限らない、

「依頼人は闇金から借りて返せなくなっちゃってな、そんであたしに泣きついて来た訳だよ、凄いだろうあたしの人徳」

やっぱりヤクザ関係かよ!

慌てて断ろうと口を開くとその前に晦さんがドスの聞いた声で言った、

「昌、まさかとは思いが断ったらどうなるのか解るよな・・・?。」

晦さん、怖ええ!

「解りました、慎んで行かもらいます」

「じゃあ、集合場所と目的地はFAXで送るからな、下見は頼むぞ昌」

「下見?解りました」

電話は切れFAXが送られて来る、それを見ながら俺はがつくりとうなだれた。

晦さんに向かってやると言ったからにはもう覆せ無い、開き直ってやるしかないのだ。

「夜逃げ、初めてのジャンルね、一応聞くけど昌は夜逃げの経験は？」

「ある訳無いだろ、下弦はどうなんだよ」

下弦も黙って首を横に振る、解りきつてた事だが今回の依頼は俺達の経験は余り役に立たないみたいだ、引越しの手伝いだけなら経験は山ほどあるが夜逃げとなるとちよつと面倒臭い、

「ばれずに迅速に、当たり前だけど忘れないでね」

引越しが終わるまで気付かれてはいけないので出来るだけ慎重にかつ速く終わらせる必要がある、

その理を俺に注意した下弦は地図を広げる、おそらくFAXにかいてある出発地点と到着地点に一番安全に行けるルートを考えているのだろうか

とりあえずこの店は引越し業者の営業許可を持っているため法的には何の問題もない、問題があるとすれば店主の性格だと思うが、もう直るまい。

「俺は今日帰って明日の用意してくるか、じゃあな」

声を掛けるが下弦は地図に集中しているようで返事は無かった。

「此処か・・・入り組んでるな」

次の日の夕方俺は依頼人の家の周りの下見をしていた、

依頼人の家は路地を抜けた先にある二階建ての古いアパートだった、隣にはちよつとしたビルが建っている、アパートに繋がる路地は複雑に入り組んでいてまるで迷宮のようだ、

「ま、自動車が行ける広さがあるだけ良いか、てゆうかまだこんな場所あつたんだな」

昭和のノスタルジックな感じを受ける道を歩いて行くと子供がサッカーをしているのが見えた、サッカーと言ってもただボールをキヤッチボール見たいに蹴り合うだけの遊びだが、意外と面白いかった記憶がある・・・ってなんか爺臭いな。

視線を子供から外す、ふと自動車の音が聞こえた、激しい音が近づいてきているかなりの速度を出してらしい、振り返ると近くのＴ字路に備えられたカーブミラーに黒いベンツが確認出来たこちらに曲がる気らしい、俺は不審者扱いを覚悟して子供達に声を掛けた、

「君達！こっちに自動車が来る、建物の陰に隠れた方が良いぞ！」

調度良くこつちにベントツが曲がって来た、それを見たのか子供達は直ぐに隠れ、ベントツをやり過ごした、通り過ぎるとまた遊び始めた子供達を尻目に俺はベントツの中にパンチパーマの人影を見付け一人ため息をついていた。

ヤクザのベントツを見送ると携帯が鳴った、液晶には下弦の名前がある、

「下弦か、何か用か」

無愛想な下弦の声が返って来る、

「どう、道の状況は？」

俺は周りを見回して答えた、

「大丈夫だ、ベントツも走れる」

それだけ言っただけ俺は携帯を切り依頼人の家に向かう事にした。

「すみません、便利屋『境』の者ですが遠藤 進一さんのお宅ですか？」

古びたアパートの二階の隅の部屋のドアをノックし返事を見る、

「はい・・・？」

気の弱そうな男の声が聞こえて来た、

「お時間よろしいですか？」

店の名前だけを告げるどうせ晦さんが来ているだろうし依頼人なら名前だけで通じる筈だ、ドアがゆっくりと開き中から神経質そうな青年が顔を覗かせた、

「どうぞ・・・」

「失礼します」

挨拶し中に入る、靴を脱ぎ揃えるために視線を落とすと見覚えのあるハイヒールが目に入った、

「・・・あの、何か？」

「いえ、なんでもありません」

やっぱりいたな、

進一に案内されて部屋に入る、部屋の真ん中あたりに置かれたテーブルにレディース用スーツを着た二十代半ばの女性が座っていた、かなりの美人だ知らない人ならまず間違いないとれるだろう、だが、

「ん？なんだ昌、来たのか」

その女性――晦さんは俺に向かって大胆不埒といった様子で笑いか

けて来る、残念な事に晦さんはかなりの変人だ、この人にはいつも振り回される、

「晦さん、何くつろいでるんですか・・・」

今も依頼人の家で紅茶とケーキを食べながら雑誌を読むという完璧なくつろぎスタイルだ、

「いや、せつかくもてなしてくれるんなら甘えようと思ってな」

「おもてなしを受けるのと、ダラダラくつろぐのとは違うでしょうよ!」

駄目だこの人、やっぱ頭のネジがどっか飛んでる、

「すみません、うちの晦がご迷惑をおかけして」

進一に向かって頭を下げる、そんな俺を無視して晦さんはケーキを食っていた。

「ゴホン、あー俺・・・いや私は『境』の店員で紫苑 昌といいま
す」

気を取り直して挨拶、

「気にしないでいいですよ・・・でも面白い人ですね、」

苦笑気味で言われてもな、心が広いなこの人

「じゃ、早速作業に掛かりますね」

そう言い俺は荷物の梱包を開始した。

「下見は終わったな？」

晦さんが俺に囁いてくる、

「はい、午前中に行ってみました、今下弦が準備に向かってますよ」

晦さんは頷き依頼人に向き直り口を開いた、

「それじゃ、あたしは一度店に戻るからこいつと一緒に荷造りしててな」

依頼人に失礼な口を叩き晦さんは出ていく。

「重ね重ねすいません！」

再び頭を下げる、だが進一は首を横に降って黙々と作業をしていた、よく見ると体が細かく震えている、やはり怖いんだな

「進一さん、安心して下さいよ、あなたも『彼女』も絶対逃がして

差し上げますから」

俺の言葉に進一は震えながらも頷く、俺はそんな進一に深緑色の作業着を渡した、

「それではこれを着て下さい」

俺の渡した作業着を悪戦苦闘しながら着込んだ進一は俺に曖昧な笑みを向けた。

遠藤 進一の部屋に昌がついたと晦さんから連絡が来た、私は『彼女』が入院している病院に入っていく、

病室に入った私を彼女は怪訝そうな顔で見つめる、私は彼女のベツトに歩み寄り一礼してから話を切り出した。

「遠藤 瑠美さんですね私は便利屋『境』の下弦と言います、以後よろしく願います」

『境』と遠藤 進一の名前を聞きすべてを察したらしく遠藤 瑠美は表情を引き締めた、

「退院は、出来ますか？」

私の問い掛けに遠藤 瑠美は頷く

「ではこちらを」

おそらく今頃昌も遠藤 進一に渡しているであろう深緑色の作業着を遠藤 瑠美に渡す、私も同じ作業着を着込み私と遠藤 瑠美は二人揃って病室から出て行った。

病院の玄関で二人組のヤクザとすれ違うおそらく遠藤 瑠美の病室に來たのだろう、だがヤクザは私達に気付かずに通りすぎていく、私と遠藤 瑠美は顔を見合わせて「してやったり」とガッツポーズをとった。

「衣類だけで良いんですか？」

荷物を確認した俺は服と下着類しか入っていないダンボールを見て聞いてみる、

「軽い方が良くからね・・・」

進一の答えに納得し俺は窓を開ける、このアパートの隣にはビルが建っていると言ったがビルとアパートの間には地元の人も知らない小道になっているのだ、しかもこのアパートの窓からその小道に降りる事が出来る、

俺はさつき進一に渡した作業着と同じ物を着て窓から顔を出すと夕日が落ちている事に気付いた、

見える範囲にヤクザがいない事に確認すると、俺は懐から30?ぐらいの金属棒を取り出す、

「それは？」

見慣れない物に進一は頭に疑問符を浮かべ俺に聞いてくる、俺は答える代わりにその棒の尻の辺りを回す、するとその棒がツルハシ状に変形した、

「うわっ！」

その変形に進一は驚きの声を上げる、

「か、格好いいねそれ」

驚きながらも感嘆する進一、俺はダンボールにプラスチック製の帯二本を巻き付けその帯にツルハシ部分を差し込む、

「ま、大丈夫だろうな」

落ちないだろう・・・多分、そのダンボールを窓の方に持って行きもう一度金属棒を操作すると棒の先端が切り離された、先端と残された棒部分はワイヤーで繋がっている、

俺はダンボールを窓の外に出してゆつくりと降ろしていきダンボールは音も無くアスファルトに着地した。

転落防止の為の柵にツルハシ状の先端を引っ掻け残った棒を進一の作業着のベルトに括り付ける、

「だ、大丈夫かな・・・？」

不安そうな進一の声、そりゃそうだ俺も怖い、顔を引き攣らせながらも進一は窓際に立ち・・・外に一步踏み出した、

ギリリと柵が嫌な音を起てる、

「ひっ！」

小さく叫び声を上げるが進一の体は極めてゆつくりと地面に降ろされていった、

上手く着地出来たらしく進一はピンピンしている、俺は進一のベルトを指差し棒を外すようにジェスチャーする、進一は頷き棒を外す、俺は先端からその棒を手繰り寄せた、

もう一度ツルハシ状の先端を柵に引っ搔けたその時、ドアが激しく叩かれた、

「遠藤！開けんかい！」

「いるのは解つてんぞ！」

ちつヤクザか！まあ鍵はちゃんとしてあるから入って来るには時間が掛かるだろう・・・だが急いだ方がいいな、

「行くしかないか」

意を決して俺は二階から飛び降りた、

「だっ大丈夫！？」

進一が心配そうな声を上げる、幸い何処にも怪我無いな、

「大丈夫です、騒ぎになる前に行きましょう」

俺が促すと進一も頷いてダンボールを持って走り出す、その後を追って俺も駆け出した。

ヤクザに見付かる事なく小道を抜けた俺と進一は近くの駐車場に来ていた

「昌、こっちだ！」

呼びかけられその方向を見てみると晦さんが『クリーニング 泡々』と書かれた白いワゴン車の前に立っていた、その表情は何処か苦々しげだ、

「晦さん？」

吐き捨てるように晦さんは言う、

「昌、下弦達がばれそうだ、直ぐに迎えに行くぞ」

晦さんの表情で今下弦達がどんな状況なのか大体理解出来た、俺は頷きワゴン車の運転席に乗り込む、

「ほれ、忘れ物だ」

そう言って晦さんは俺に免許証を渡す、俺はまだ取れる年齢じゃないので偽装免許証だ・・・、

「・・・仕方ないか」

イグニッションにキーを差し込みエンジンに火を入れる、

「ちょっと待って、昌君てまだ免許持っていないよね」

進一が思わず声を上げたが無視してワゴン車を出す、

「進一君、諦めたほうがいい」

晦さんが進一に告げ黙らせた、

「じゃ、行くぜ」

そう言つて俺はアクセルを踏んだ、

「・・・凄い！」

進一が思わず唸る、俺が意外と運転上手いのに驚いたのかもしれない、

進一のアパートから瑠美の入院していた病院までは自動車で40分ぐらいだ、日は沈んだがまだ帰宅ラッシュには間がある

「急ぐか」

一人呟き俺はワゴン車を加速させていく。

「下弦ちゃん、もしかして私達ばれてるのかな？」

並んで歩く遠藤 瑠美が心配そうなに私に言う、私は遠藤 瑠美に目をやり口を開く、

「バレかけてるみたいですね」

こんな状況で隠してもしょうが無いと判断し正直に告げる、

「どうしよう・・・」

私は時計を見る、昌との合流時間まで後15分、そろそろ連絡があってもいいはず・・・

心細い、というか連絡が無いのは心配だ、速く携帯が鳴ってほしい、

「・・・・・・ッ来た!」

携帯が鳴る、弾かれたように私はポケットにある携帯を掴み開く、

「昌・・・!」

来たのはたった一通のメールだ内容はただ一言だけ、

『下弦、走れ!』

私は遠藤 瑠美の手を取り走り出す、私達を見張ってたヤクザ達も慌てて追い始めた、

「下弦ちゃん、追いつかれちゃう！」

遠藤 瑠美が悲鳴に近い声を上げる、確かに手を引っ張りながら走るこの状態では直ぐに追いつかれる、それなら

「瑠美さん、すいません！」

私は遠藤 瑠美を所謂お姫様抱っこの状態にする、

「か、下弦ちゃん！？」

遠藤 瑠美が驚いたような声を上げたが逃げ切るにはこれしか無い、

私は目を閉じ脚に力を込める、そして、

「駄目！捕まっちゃうよ！」

遠藤 瑠美の悲鳴同然の声を機に私は全速力で駆け出した、

「なっ、なんじゃアイツは！」

「あのガキ人間か？」

遙か後方からヤクザ達の焦った声が聞こえてくる、それはそうだろう女性とはいえ人を抱えて走っている私に追い付け無い処か引き離されているのだから。

「うわぁ・・・」

遠藤 瑠美が呆けた声を上げると共に私は更にスピードを上げた、周りの人達にぶつかりそうになりながらも何とかすり抜けるように走り抜ける、

後もう少しで昌達との合流地点だ、遠藤 瑠美を抱えているため時間を確認する事は出来ない、信じるしかない、昌達が来ている事を、そう思いながら走っていると100mぐらい先に白いワゴン車が見えた、よく見ると『クリーニング 泡々』というロゴがある、そのワゴン車から三つの人影が私達の方に走って来るのが解った。

「来てくれた！」

嬉しくて一瞬立ち止まりそうになる、

だが、油断したその一瞬に黒いベンツがワゴン車と私達の間を割って入って来た、ベンツからヤクザっぽい人達が四人下りてくる、

「あっ！」

四人のヤクザは等間隔に広がり距離を詰めて来る、後ろのヤクザと挟み打ちにするつもりだろう。

「ていつ！」

私は前方のヤクザの頭上を飛び越える、

「きゃああ！」

遠藤 瑠美が悲鳴を上げる、幾らなんでも怖かったらしい、

ヤクザの後ろに着地したが態勢を崩してしまう、

「しまっ・・・！」

倒れはしなかったもののヤクザ達には追い付かれる、

「手間かけさせやがって！」

ヤクザの中の一人が拳を振り上げる、私は恐怖の余りに目を閉じた。

だが、

「ぐあっ！」

ヤクザのものと思わしい短く野太い悲鳴と共に、

「大丈夫か？」

と声を掛けられた、

私は恐る恐る目を開ける、そこには私の前に立ち塞がりヤクザ達を睨み付ける昌の姿があった。

「昌、間に合うのか!」

「大丈夫なんですか」

時計を見ながら晦さんと進一聞いてくる、俺は笑いを浮かべ頷いた、

「分かった、任せる」

晦さんはそれっきり目を閉じた、俺は合流時間の5分前になったのを確認しポケットの中にある携帯を操作し下弦にメールを出した、このメールを合図にして下弦はアクションを起こす手筈になっている、

メールを出し、俺は前の自動車を追い抜きながら合流地点を目指す、5台目を抜いた時後の進一に声を掛けられた、

「な、なんでそんなに簡単に抜いて行けるんだ!」

確かに不思議だろう、俺は前を見ながら答えた、

「なんて言つか読めるんですよ、周りの動きが」

進一が俺の答えに更に言い募ろうとするがそんな場合じゃない事に

気付き黙り込んだ。

「昌！いたぞ、下弦達だ！」

晦さんが指で指し示す先にに瑠美を抱えた下弦の姿が見えた。

ふと見覚えのある黒いベンツが見え俺はワゴン車を止めて外に飛び出した、

「昌どうした！」

「昌君？」

あのベンツを見たのは進一の家近くだった、それが此処に現れたって事は進一に金貸したヤクザなんだろう、

「昌、待て！」

「危険だ、昌君！」

叫びながら後ろを走って来る晦さんと進一を置き去りにして走る、俺の10mぐらい先でベンツが止まり中から一斉に四人飛び出して来た、

四人は俺に構わずに下弦達の方に向かって行った、

「うわ、俺達より多いな」

増えたヤクザに思わず呟いたとき、俺の側のドアからもう一人出て来た、

・・・なんて言うか、間抜けに見える、俺は懐の中の金属棒に手をやりながらヤクザに走り寄る、

「何だお前？」

そのヤクザが俺に訝しげな視線を向け詰問してくる、俺は詰問を無視し懐から一気に金属棒を振るった。

「ぎゃあー！」

金属棒はそのヤクザの顎に当たり意識を吹き飛ばした。

「きゃああー！」

瑠美の悲鳴が聞こえベントツのドアに手を掛け開け放つ、

「昌ー！」

晦さんから呼び止められる、振り向くと晦さんから何かを投げ渡された、

「早く行け！」

俺は頷き、開け放したベントツのドアに足を掛けベントツの屋根を転がる、

「手間かけさせやがって！」

屋根から転がり落ちると俺の直ぐ目の前で下弦が今まさに殴られようとしていた、俺は猛ダツシュし下弦を殴ろうとしていたヤクザに蹴りを入れる、

「ぐあっ！」

蹴り飛ばしたヤクザが野太い悲鳴を上げ倒れる、俺は周りを囲むヤクザ達を睨みながら下弦に声を掛ける、

「大丈夫か？」

「うん、平気」

短く簡潔に下弦が答える、俺は頷いた、

「さあて・・・」

俺が金属棒を構えると周りのヤクザも身構える、だが

「逃げるぞ！」

俺達は踵を返して逃げに入った、

「なっ、待てや！」

「このガキどもが！」

ヤクザ達は一瞬ア然となった後慌てて追って来る、俺は先程晦さん

から渡されたものをポケットから取り出す、それは遭難した時に自分の位置を知らせるのに使う発煙筒だった。

発煙筒から煙りを起こし路上に放る、周りは火事でも起こったかのように煙りが立ち込めて混乱が沸き起こった。

「早く乗れ！」

その混乱の中俺達はワゴン車の中に乗り込む、

「瑠美！」

「進一！」

瑠美と進一は抱き合う、目からは涙が溢れ、さながら感動の再会といった感じだろうか、

「昌、出して早く！」

下弦が後ろを見ながら言ってくる、バックミラーで後ろを確認すると黒いベンツが2、3台見えた、

「ああ、分かったよ！」

俺はアクセルを踏みワゴン車を発進させる、

「待ちやがれ！」

ヤクザの声が後ろから聞こえてくるがそれに構ってはいられない、

何とかヤクザのベントンを振り切ろうとするが中々引き離せない、車線を変更したり路地に入ったりしても奴らはピッタリついて来る。

「奴ら、中々やりやがる」

思わず呟きが漏れる、そんな俺に晦さんは俺に激を飛ばした。

「何やってんだ、もつと頑張れ！」

俺は横目で晦さんを見る、・・・絶句した、なぜなら、

「こんな時に菓子何か食ってんじゃねえ！」

晦さんの手にポテチの袋があつたからだ。

思わず突っ込みを入れる、だが後ろの下弦が冷めた声で言って来た、

「そんな事はどうでもいいから急いで」

そんな事って・・・、

「あー分かったよ！たくっ」

確かにそんな場合じゃ無いな、しかし、

「やばいな、追いつかれる」

状況は芳しくない、すると瑠美が呟くように口を開いた、

「やっぱり、私は死ぬべきだったんだ・・・」

その言葉を聞いた瞬間下弦が声を上げた、

「そんな事言っちゃだめです！」

運転しながら俺も口を開く、

「下弦の言う通りだ、せつかく進一さんが闇金から金借りてまであなたの手術代を払ったんだ、死ぬべきだなんて言うべきじゃない」

俺の言葉に進一は顔を上げる、

「知っていたんですか!？」

進一は驚いたように言う、それをバックミラー越しに見ながら俺は更に語る、

「下弦と一緒に下見がてら昨日と今日で慌てて調べたんですけどね」

俺が苦笑混じりに言うところ今度は下弦が話し出した、

「遠藤 瑠美さん・・・貴女は以前、恐らく幼少期に一度夜逃げを経験されていますね？」

下弦の言葉に瑠美は頷く、

「そのせいで貴女は未就籍者になっています、そのため貴女は保険に入ってはいなかった、もし病気になるければまだ楽だったのかも、ですが・・・」

言葉を濁した下弦に続き進一が口を開いた、

「はい、あなた方の言う通り瑠美・・・妻は重い病気にかかりました、幸い手術すれば治ると医者に言われましたがその手術にかかる費用が」

進一に晦さんが続き、

「保険に入って無いから全額払わなければならぬ、だが」

俺が締める、

「金が足りない、だから闇金に手をだしたって訳だな」

俺達が順に事の経緯を語る中瑠美は黙ったままぴくりともしなかった、そんな瑠美に俺は言い聞かせる、

「安心してくれよ、命に変えても逃げ切るから」

俺の言葉に瑠美は頷いた、晦さんは俺を見て笑いを浮かべながら言う、

「いいのか？安請け合いして」

晦さんの言い方にムツとしながら言い返した、

「いいんすよ、俺達は便利屋だ人を楽をさせる為に命かけるのは当たり前でしょう」

今の俺の発言に瑠美と進一が声を合わせて、

「「なんでそこまで!?!」」

と聞いてきた、俺の代わりに下弦が返す、

「便利屋に来る依頼のほとんどは犬の散歩や草刈りなど誰にでも出来る簡単な作業です、ですがわざわざお金を払ってまで私達に依頼をしてくるんです、なんでだと思いますか?」

質問を質問で返した下弦、瑠美と進一はしばらく考えてから進一の方が口を開いた、

「楽・・・をしたいからかな?」

下弦は頷きもう一度語る、

「その通りです、私達便利屋は依頼人の代わりに力を使い依頼人には楽をして貰う、そんな仕事なんです、ですから・・・」

一瞬黙り下弦は力を込めて口を開いた、

「ですから、私達はあなた方に楽になってほしいんです!」

下弦の訴えに瑠美と進一は黙り込む、そこに晦さんが口を挟む、

「下弦の言う通りだ、たとえあんた達が代金払え無くても・・・な」

晦さんの衝撃発言に瑠美と進一が固まった、晦さんは構わずに続ける、

「借金まみれのあんた達がともに代金払えるなんて思っちゃいいよ、ただあんた達を楽にしてあげたい、そう思ったから手を貸したのさ」

しばらく固まってから瑠美の方が口を開いた、

「もしかして下弦ちゃんと昌君も分かったの？」

俺と下弦は頷く、瑠美は俯きたった一言。

「ありがとうございます・・・」

と言った

黙ってた進一もほとんど泣き声で、

「本当に・・・本当にありがとうございます！」

と頭を下げた、

ここまで言われて成し遂げなければ男じゃねえな、

「それじゃ始めますか」

後ろからヤクザのベンツが追って来る、だが俺は妙に冷静だった、いい感じに集合しているのが解る、そして周り全ての動きが手に取るように理解できるようになる、その瞬間俺はアクセルを踏み込んだ、

ワゴン車が急加速する、前を走る自動車をスラロームを走るかのように追い抜いていく、ヤクザのベンツはついて来れずに自動車の影にきえていった、

だが後方の路地裏から一台のベンツが出て来る、そのベンツに乗っているのは見たことのあるパンチパーマ、進一の家近くで見た奴だ、

奴が運転するベンツは華麗な走行で俺達の乗るワゴン車についてくる、改めて感じるがいい腕だ、

「追い付かれる！」

瑠美が叫ぶ、

「大丈夫です、昌を信じて下さい」

下弦の冷静な声全く不安を感じていないような声だ、

その下弦の言葉に報いるべく俺はワゴン車を路地に入れた、後から

ベンツもついて来る、俺とヤクザはかなりのスピードで路地を疾走する、狭い道だ壁とワゴンとの距離はそんなに無いだろう、

「わあ、ぶつ、ぶつかる！」

今度は進一、夫婦揃ってやかましい、

「大丈夫だって、ほら」

ぎりぎりですら走っているのを見ている晦さんが子供をあやすように言い、進一は黙った。

ヤクザのベンツも何とかついて来るが事故を起こす事を恐れてか俺程にはスピードを出せていないワゴンとの距離はどんどん開いて行く、

路地の出口が見えて来た俺はワゴンを加速させていく、だがその先は自動車の往来が激しいこのまま行けば事故になるかもしれない、

だが往来する自動車の波が一瞬だけ途切れた、俺はその一瞬にワゴン車を無理矢理入れあのパンチパーマの運転するベンツを振り切った。

「よっしゃあ！」

俺はガッツポーズをする、瑠美と進一はジェットコースターに乗った後みたいにふらふらだった。

数時間後、俺達は東北地方の某県に来ていた。

「ありがとうございました！」

「あなた達には感謝してもしたりないわ」

瑠美と進一が口々に礼の言葉を言う、此処が夜逃げの目的地つまりゴールだ、

「いやいや、あたし達は依頼を果たしただけさ、なあ昌、下弦」

晦さんの発言に俺と下弦は頷く、

「でも・・・」

更に言い募ろうとした瑠美に晦さんは黙って首を横にふる、それを見て瑠美は口を閉じた。

「この近くにあたしの知り合いがいる、そいつにあたしの名刺を見せれば何かと面倒を見てくれる筈だ」

そっぴいながら晦さんが進一に名刺を渡す、

「本当に何から何までお世話になりました！これ少ないけどお礼です」

進一は財布からお札を一枚渡し深々と礼をした。

「瑠美さんお幸せに」

「うん、当たり前よ、下弦ちゃんさよなら」

下弦と瑠美は昔からの親友のように親しげに別れの挨拶をする、

「進一さん、頑張ってください」

「ああ、頑張るよ」

そして俺は進一と固く握手した。

「ご利用ありがとうございます、二度とお目にかからない事を切に願います」

あんまりと言えばあんまりな晦さんの挨拶で俺達便利屋『境』と瑠美、進一・・・遠藤夫婦は別れた、

「ありがとうございます！」

「あなた達も頑張ってたね！」

手を振りながら闇の中に消えて行く遠藤夫婦を見送り晦さんが口を開く、

「まずは着替えるか」

そう言つてワゴン車に入る晦さん、

「除かないでね」

そう俺に残し下弦もワゴン車に入つて行つた、

「・・・俺も着替えるか」

一人眩き俺は深緑色の作業着を脱いだ、その作業着を裏返すと全くデザインの違う作業着に変わる、早い話しがリバーシブルだ。

「オーイ、終わったか？」

着替え終わった俺はワゴン車の中にいる下弦と晦さんに声をかける、

「あたしは終わったぞ」

「私も」

二人続けて返事が来たので俺はワゴン車の中に入った、

「じゃ帰るか」

そう言っただけで俺さんがワゴン車の中にあるスイッチを押す、すると低く唸るような音が鳴った、中にいてわからないが外からだと言わんばかりの色が白から黒へ、文字がクリーニング 泡々から堺引越しセンターに変わった筈だ、

ほとんどボンドカーのようなこの機能はバレルを防ぐために俺さんが自作したものだ、そういえばナンバーも別なナンバーに変わった筈。

とりあえず変身したワゴン車を運転し一路東京へ、

「そつえば、幾ら貰ったんですか？」

さつき進一から金を受け取っていたのを思い出して俺さんに聞く、眠いのか俺さんは間延びした声で答えた、

「ん、五千元、なんかさパーツと使いたいな」

それを聞いて俺は思い付いた、

「じゃあ焼肉行きましょうよ」

晦さんは少ししゃきつとして反応する、

「焼肉か・・・いいな、よし！明日は焼肉だ！」

「よっしあ、下弦も賛成だよな・・・下弦？」

下弦が反応しない、俺は不審に思ってバックミラーで下弦を見る、すると

「なんだ寝てんのか」

スウ、スウと可愛い寝息を立てながら下弦が熟睡していた。

「昌、ゆっくり行くか？」

晦さんは寝ている下弦を見て俺に言う、俺も

「そうですね」

とだけ返しワゴン車を走らせた。

普通では決してありえない仕事をした俺達を真夜中の静寂が包んでいた。

（後書き）

お読み下さった方々、このような駄文に耐えて頂き真にありがとうございます。ございました、つきましては評価、感想等お氣が向いたら宜しくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9141k/>

便利屋『境』

2011年1月12日02時39分発行